

■ 調査目的

実態把握が十分でない障害種の方のうち、盲ろう者が生涯にわたってスポーツ・運動・遊び等（以降、運動・スポーツ等）を実施するための基盤を整備する観点から、運動・スポーツ等実施の現状を把握するとともに、身近な場所でスポーツ等を実施できる環境の整備等を図ること。

■ 課題

出会い・気づきのフェーズ

1. 盲ろう者や家族・介助者等に情報が効果的に伝わっていない。
また、体験機会が限定的である。

参加・体験のフェーズ

1. 盲ろう者の障害特性を理解して、盲ろう者ができることを盲ろう者と一緒に発見しながら、個々の実態に合った方法を工夫して見出し、目標達成に向けて指導できる人材が不足している。
2. 支援機器（装着型振動デバイス等）は、盲ろう者が運動する際、情報保障の補助的な手段として有用と考えられるが、仕様場面がまた限定的である。また、安全性の実証が十分になされ、安全に利用できる支援機器であることが大前提である。
3. 大会やイベント等での運動・スポーツ等実施の際に、盲ろう者が参加できるような情報保障や配慮を受けられていないことがある。
4. 全国障害者スポーツ大会の盲ろう者向けルールに改善の余地がある。

継続のフェーズ

1. 卒業後に運動・スポーツ等の機会提供が減少する。
2. 盲ろう者に合わせたルールの周知・柔軟な変更がなされないことがある。

■ 必要な環境整備（結論）

1. 地域の関連団体による盲ろう者や家族・介助者等への情報提供や運動・スポーツ機会の充実

- 当事者団体において、盲ろう者が参加できる運動・スポーツ等の紹介を行う窓口を整備
- 盲ろう者向け相談窓口において、運動・スポーツ実施機会や用具の貸出に関する制度を紹介
- 学齢期の児童生徒が地域のスポーツ施設、スポーツクラブ、放課後等デイサービス、福祉施設等において運動・スポーツ活動を行えるよう機会の充実を図るとともに、学校や放課後等デイサービス、福祉施設等で、児童生徒に対する運動・スポーツ等参加機会に関する情報提供
- 盲ろう者が運動・スポーツ等に参加しやすいネットワークが構築されるよう、当事者団体、スポーツ団体、障害者スポーツセンター、学校や障害者施設など福祉関係機関、医療機関、行政機関等の連携を強化

2. 盲ろう者の運動・スポーツ等への参加を支援できる人材の育成

- 障害者スポーツセンターや地域の障害者スポーツ協会にて、盲ろう者が運動・スポーツに参加する際の支援方法についてノウハウを蓄積し、他施設や学校と連携して情報共有や研修を行う取組を促進
- 障害の程度や時期等、盲ろうの障害の状態による違いを理解し、個別の支援ができる人材を育成
- 家族や介助者が運動・スポーツ等の体験会に参加し、一緒に盲ろう者と活動することで支援方法を学ぶ機会や活動機会を提供

3. 安全性が確保された支援機器活用に関する周知の促進

- 盲ろう者が介助者とともに運動・スポーツ等を実施することが容易になるよう、安全性が確保された支援機器の活用のメリットや活用方法に関する周知を促進

4. 合理的配慮の提供の促進

- 合理的配慮の提供に関する周知啓発

5. 全国障害者スポーツ大会における盲ろう選手へのルール適応

- 令和5年に行われたルール改正の成果を検証し、必要な改善方策について引き続きフォローアップを実施、改善

6. 盲ろう者が参加しやすい大会の整備

- 盲ろう者のための大会、既存の大会の競技における盲ろう者を想定した区分の設定、参加者の条件を揃えた競技を行う大会等の開催を支援

- 盲ろう者の運動・スポーツ等への参加の障壁となる身体的特徴、精神的特徴を調査した。
- 海外および国内の文献を対象に調査した。
直接的な論文が見つからなかったため、主に盲ろう者の身体運動について整理している海外の文献から特徴を洗出し整理した。
- 身体的特徴、精神的特徴に加え、コミュニケーションに起因する特徴が、運動・スポーツ等への参加阻害要因となっている可能性が示唆された。
これらを踏まえて、「盲ろう者に運動・スポーツ等への参加機会を提供する際に留意すること」を整理した。

※限られた文献からの調査であり、盲ろう者の全体像とは言い難い点を留意されたい

■身体的特徴（例）

- バランスをとることが難しい
- 次の瞬間の体の向き等の予測が難しい
- 自身の取った動作に反応して補助的にステップングを行うことが難しい
- 自分の立ち位置の傾斜の把握が難しい

■精神的特徴（例）

- 運動に対する恐怖心が芽生えやすく、他者との信頼関係の構築が難しい
- 運動有能感が低下 等

■コミュニケーションに起因する特徴（例）

- コミュニケーションの対象を発見することが困難
- コミュニケーション方法が多様であることにより身体活動への参加が難しい
- 通訳と運動を同時に行うことが難しい

【盲ろう者に運動・スポーツ等への参加機会を提供する際に留意すること】

- ① それぞれのコミュニケーション手段に合わせた情報保障を提供できる体制を担保
- ② 情報保障に時間が掛かるため、盲ろう者が焦らず運動・スポーツ等を実施できるよう、ゆっくりした進行やそれを許容する雰囲気づくり
- ③ ルールや用具を柔軟に変更・調整するなど、個別の盲ろう者が実施できる環境の構築

調査対象

- 全国盲ろう者協会会員：635名
- 盲ろうの子とその家族の会ふうわ会員：61名
- その家族・介助者

回収数

- 盲ろう者：107名
 - 全盲ろう：25名
 - 弱視ろう：22名
 - 全盲難聴：21名
 - 弱視難聴：33名
 - 未回答：6名
- 介助者・家族：50名

主な調査項目（本人）

- 回答者の基本情報
- 運動・スポーツ等への参加機会に関する情報の入手方法
- 運動・スポーツ等の実施経験
- スポーツ大会への出場経験
- 運動・スポーツ等に参加する上での障壁・工夫

主な調査項目（介助者・家族）

- 回答者の基本情報
- 介助の方法
- ご家族または介助者等自身の課題
- 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施環境に感じる課題
- 盲ろう者の運動・スポーツ等を行う場面で感じた障壁・実施してきた工夫等

主な調査結果（本人）

- これまで運動・スポーツ等の実施経験あり(81.4%)
- **ポッチャ（4.5%）、散歩（ぶらぶら歩き）（4.5%）ボウリング（4.0%）、水泳（4.0%）、陸上競技（3.5%）、体操（3.5%）**等があげられた。
- 団体競技で多かったものは、**ポッチャ（4.5%）、卓球（ラージボール含む）（2.5%）、バレーボール（シットイングバレーボール/フロアバレーボール/ビーチバレー等）（2.5%）**であった。
- 学校外でのスポーツ大会経験あり(89.3%) 一方、ルールや使用用具の制約により大会に出られない経験をしたことあり(21.4%)
- 障壁
 - 盲ろう者を理解して指導できる人材の不足(63.2%)
 - 分かりやすい情報の不足 (57.9%)
 - 実施できる種目が無い・少ない(56.6%) 等

主な調査結果（介助者・家族）

- 家族・介助者自身に「とても課題を感じる(40.5%)」「やや課題を感じる(35.7%)」
 - 運動・スポーツ等に関する知識不足や介助方法に関する知識不足(55.8%)
 - 実施できる場所等の情報収集能力(51.2%) 等
- 盲ろう者の運動・スポーツ等の実施環境に「とても課題を感じる(40.0%)」「やや課題を感じる(22.2%)」
 - 障害特性を理解して指導できる人材の不足(66.7%)
 - 盲ろう者が参加できる運動・スポーツに関する情報発信の不足(57.6%)
 - スポーツ実施における介助者への理解や介助者に対するサポートの不足(51.5%) 等

対象団体 計：14団体

運動・スポーツ等提供団体、障害者スポーツセンター、特別支援学校、支援機器開発団体、当事者団体、盲ろう者向け相談窓口、障害者施設

対象個人 計：26名

全盲ろう：5名、全盲難聴：1名、弱視ろう：6名、弱視難聴：7名、介助者：5名、指導者：1名、大会運営者：1名

(団体ヒアリングより)

運動・スポーツの機会の提供頻度

- 学校においては体育や自立活動の授業の他、休み時間や部活動等、多様な場面で機会が提供されている。
- 福祉施設や障害者スポーツセンター、個別のスポーツ提供団体では希望者に対して、月に1～数回の機会が提供されている。
- 学齢期と卒業後では提供状況に大きな差がある。

提供されている運動・スポーツ等

- 学校においてはチームスポーツ・個人スポーツ問わず機会提供がなされている。その他の団体では、主に個人スポーツの機会が提供されている。
- 盲ろう者に振動を通じて補助的に情報を伝える装着型のデバイスを開発し、実際に使用されている例があった。

運動・スポーツ等機会の情報提供や普及の取組み

- 能動的に盲ろう者を対象に運動・スポーツ等の情報提供をしている団体はなかった。障害者全般向け、視覚障害者向け等の案内を団体の利用者全員に向け、メールやチラシラックにおいて案内する形で周知をしていた。

行われている工夫や配慮

- 本人に直接触れる、道具を介して伝達するといった、触覚を用いた方法で運動・スポーツ等実施時に必要な情報を提供していた。
- 盲ろう者だからこうする、という一律のやり方で対応するのではなく、それぞれの障害の状況等に合わせて、実施しやすいルールで既存の運動やスポーツを実施していた。

(個人ヒアリングより)

運動・スポーツの実施状況

- 運動・スポーツ等の種類については、マラソン・ランニングやタンDEM自転車、水泳・水遊び、柔道、フライングディスク、ボウリングを現在実施している方・過去に実施された方が複数いた。学齢期の方については、学校で様々な運動の経験をしていた。
- 実施の頻度は、日常的に実施している方から、大会前のみ、体験教室やイベント開催時のみ実施されている方などさまざまであった。マラソンは、伴走クラブに参加し定期的に実施されている方が複数いた。

全国障害者スポーツ大会における盲ろう者向けの新ルールについて

- 全国障害者スポーツ協会が全盲ろう者を想定して改訂した競走や競泳のスタート時等や、跳躍・投てきの試技時等の合図に関する新たなルールがあることで、「安心して参加できるようになる」という意見が挙がった。
- タイムを競う競技については合図のタイミングの厳密性に関する難しさもあり、振動を通じて合図が伝わるよう機器等の活用が求められていた。

補足) 追加された新ルール（競技規則）

- 競走競技：スタートのピストル音の伝達について
- 競走競技：「Set」という合図の伝達について
- 跳躍競技：旗の合図の伝達について
- 投てき競技：旗の合図の伝達について
- 水泳：ホイッスル、号令、スタート合図等の伝達について

大会に関する意見

- 盲ろうというカテゴリを求める声や、視覚障害者等と同じ条件で参加できる大会についての要望が複数あった。

運動・スポーツ等実施時の課題

※課題については、P1にまとめて記載